

---

# デジモンストーリー

貧乏巫女

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

デジモンストーリー

### 【Nコード】

N5236I

### 【作者名】

貧乏巫女

### 【あらすじ】

人間がデジタルモンスターの住む世界、デジタルワールドに行き、デジモンをよりよく育てるために冒険していく物語

## エピソード

デジモンアドベンチャー02の時代から5年・・・

地球上に存在する異界「デジタルワールド」は少しずつ開拓されていった。その中心となる都市が「デジセントラル」・・・

地球とデジタルワールドはパソコンのモニターによって繋がっている。人間とデジモンはデジタルワールドをよりよくしていくために開拓を進めながら仲良く暮らしていた。そして・・・

また1人デジタルワールドにやってきた少年がいた・・・

パソコンから新たな世界に……

キーンコーンカーン……

午後の授業の終わりを告げるベルが鳴る。みんなは帰り支度を始め、中にはもうすでに帰りはじめる児童もいる。そしてまた、帰り支度を整えて教室を出る児童がいた。少年の名は戸泉鍵、11歳だ。鍵は辺りを確認してからパソコンルームと書かれた教室に入っていた。中には20を超えるパソコンとそれを管理するための先生の用のパソコンがある。鍵は1台のパソコンを起動させた。そしてインターネットへ繋ぐ。

「最近、なんとかモンスターって流行ってるんだよなあ、あれは何だろう……？」

検索サイトに繋ぎ、鍵は「謎のモンスター」と入力した。すると……

「ん？デジタルモンスター？なんだこれ？これか？今流行ってるモンスターって」

今度は「デジタルモンスター」と入力してみる。すると……突然、たくさんの生き物の映像が出た。

「うわっ、これがデジタルモンスター？」

パツ。突然その映像は消えた。それと同時に1通のメールがパソコンに届いた。

「え、メール？えつと『あなたはデジタルワールドを開きますか？』だっって？」

その時だった。突然パソコンのモニターから強い光が放たれた。

「う、うわっ！？」

鍵はパソコンの中へと吸い込まれていった。

「う、うん？あれ？ここは・・・？さっきまでパソコンルームにいたのに・・・」

気がつくとも鍵は森の中にいた。見たことのない世界だ。と、鍵は首から機械がぶら下がってることに気づいた。

「これ、何だろう・・・」

すると話し声が聞こえたので、鍵は話し声のするほうへ行ってみた。複数の声がある・・・声の主を見て鍵は驚いた。さっきパソコンの画面に映ったデジタルモンスターだったからだ。長のようなデジモンがみんなに話している。

「・・・つまり、この世界をよりよくしていくためには人間達に育ててもらふ必要があるんだよ。皆わかったかい？」

『はい』

「では今日はここまでにしてデジセントラルに戻ろう。」

そういうと長のデジモンは近くにあったゲートに乗り、消えてしまった。

鍵はその後を追い、ワープパネルを見た。

「さっきのデジモンはこれに乗ってたけど・・・えい」

鍵もワープパネルに乗り、消えた。

次に着いたのは大きな都市だった。ゲートの前にはまた違うデジモンがいる。

「ねえ、君もデジモン？」

鍵はクリーム色の垂れ耳デジモンに話しかけた。

「うん、ぼくは『テリアモン』だよ。ああ、君は新しい人だね。オブサーバーにいくといいよ」

「オブサーバー？」

「うん、この都市の中心だよ」

「わかった、ありがとう」

テリアモンに礼を言い、鍵はオブサーバーへと向かった。

「うわーすごい、いろいろなデジモンがいる」

鍵はキヨロキヨロしていたので目の前を歩いていた男の子にぶつかった。

「あ、ごめん」

「いや別に大丈夫だけどよ。ん？お前もテイマーか？」

「テイマー？」

「おう、俺はテイマーの裕二ってんだ」

「あ、僕は鍵。よろしく」

「よろしくな。あ、そうだお前デジファームって持ってるか？」

「デジファーム？ファームって牧場？」

「おう、俺のデジファーム見せてやるよ」

と裕二は首からぶら下がっている機械の画面を見せてくれた。

そこには獣種族のデジモンがたくさん映っていた。その中の1匹が嬉しそうに動いていた。

「このデジモン、なんか嬉しそうだね」

「ああ、そいつは『ガブモン』っていつて俺のお気に入りなんだ」

「へえ〜。あ、そうだ君さオブサーバーってどこにあるか知ってる？」

「ん？ああ、オブサーバーならここをまっすぐ行っただとこにあるよ」

「ありがとう。それじゃあ」

「ああ、お前もがんばれよ」

裕二に礼をいい、鍵はオブサーバーへ向かった・・・

## データ森のオーガモンを倒せ

祐二からオブサーバーの場所を聞いた鍵はとある建物の中を歩いてきた。・・・と、

「やあ、君じゃな。新しいタイマー候補は」

鍵が振り返るとそこには白衣を着たお年寄りがいた。

「あのう、あなたは？」

「わしは木暮というものじゃ。グレさんとも呼んでくれ」

「はあ、グレさん・・・」

「うむ。ところで君は鍵君じゃな？」

「え、あ・・・はいそうですけど、どうして僕の名前を・・・？」

「さきほど君はパソコンでメールを見てこの世界に来たじやろう？」

あのとき、画面に触れた瞬間に、君のデータを読み込んで、君がタイマーにふさわしいと思ったから呼んだのじゃ」

「はあ、なるほど・・・」

そういうことだったのか、と鍵は納得した。

「ではいくぞ・・・」

「行くってどこへ・・・ですか？」

「クラブスエンジェモンのところじゃ」

5分後、鍵はオブサーバーについた。テントウムシのようなデジモンが待っていた。

「よう来はりましたなあ、あんさんがケンはんでっか？」

「はっはい・・・」

(デジモンにも関西弁とかあるんだ・・・) そうツツコム鍵だった。

「やあ待っていたよ」

声とともに新たなデジモンが現れた。そのデジモンはさっき鍵が森で見たデジモンだった。

「あなたは、さつき森にいたデジモン・・・？」

「・・・そうか、君はさつき僕らを見ていたんだね。では君がここに呼ばれた理由はもうわかっているかな？」

「はっはい。タイマーになるために・・・ですよね？」

「そのとおり。そこで君にはまず、タイマー登録をしてもらおうよ。ここを降りると、カウンターにアグモンがいるからそこで登録するんだ。」

「はい、わかりました。あ、あの・・・」

「なんだい？」

「デジファームって僕にももらえるんですか？」

「もちろん・・・と言いたいところだけど、君にはまずタイマーになってもらって、君の力を見せてもらいたい。相応しいと判断できたら、デジファームを渡すよ」

「わかりました。では行つてきます」

鍵はアグモンらしきデジモンを見つけた。

「君がアグモン？」

「そうだよ、ああ君がケン君だね。話は聞いてるよ。それじゃあ、君の『デジヴァイス』を貸してくれる？」

「デジヴァイスってこれのこと？」

「そうだよ。そのデジヴァイスには君の情報が入ってるからね。じやあちよつと待っててね。」

カチカチとデータを入力する音が聞こえる・・・

「よし、じゃあこのデジヴァイスは君に返すね。それと君はタイマーになったから、『パートナーデジモン』を1体選んでね。」

鍵の前に3体のデジモンが現れた。それぞれ、コロモン、ツノモン、タネモンだった。

鍵は悩んだ挙句、コロモンをパートナーにした。

「よろしくねケン」

「こちらこそ」

デジモンを仲間にした鍵はオブサーバーに戻った。  
サーバーではクラビスエンジェモンが待っていた。

「テイマーになったみたいだね・・・では突然なんだけど、データ森に行ったガブモンが戻ってこないんだ。様子を見てきてもらえないかな？」

「わかりました」

鍵はすぐに建物から出てワープパネルの前に立った。

「えっと・・・これってどうやってデータ森に行けばいいのかな？」

「君データ森に行くの？」

テリアモンが近づいてきた。

「う、うん。どうやって行けばいいかわからなくて・・・」

「デジヴァイスに『アドレス』が入力されてるところならその『アドレス』を選択すればいけるよ」

「わかった、ありがとう。それじゃ行ってくるよ」

「はい行ってらっしゃい」

鍵はデータ森にワープした。

「ここって僕が最初に来た場所・・・」

鍵はうろろしながらガブモンを探していた。・・・と

突然、ポヨモンが現れた。コロモンは攻撃を続け、ポヨモンを倒した。コロモンはアグモンに進化できるようになった。

「よし、アグモンに進化させよう」

コロモンはアグモンに進化した。

また現れたポヨモンを倒したところで鍵はガブモンを見つけた。

「君がガブモンだね。こんなところで何をしているの？」

「ああ、それが大事な装備チップを運んでる途中で落としてしまったんだ。あれがないと帰れなくて。もしかしたら、あっちのほうかも。でも・・・」

「どうしたの？」

「この先にはオーガモンが出るんだ、どうすれば・・・そうだ！君、申し訳ないけど代わりに探してきてもらえないかな？」

「わかったよ」

鍵はさらに奥へと進んだ。そこには装備チップが落ちていた。

「やった、これをガブモンのところへ持ってってあげよう」

その時だった。森の奥から棍棒を持ったデジモンが現れた。オーガモンだ！

「お前ら、オイラの縄張りで何してやがる！」

「ご、ごめん。このチップを取りに来たんだ」

「そのチップはここにあったからオイラのものだ。返さなければ倒してやる！」

「そ、そんなあ」

鍵は理不尽だと思った。しかし、言ったところで何も変わらないと思ひ、戦闘モードに入った。

鍵はアグモンで攻撃した。しかし、オーガモンの圧倒的な力の前でアグモンは倒れそうになっていた。

その時！

「アグモン！これを使うんだ」

ガブモンがアグモンへ何かを投げた。それはHP回復チップだった！

HPが満タンになったアグモンは再びオーガモンを攻撃した。そしてついにオーガモンを倒した！

「うがあああああああ・・・バカなああああああ・・・」

オーガモンは粒子になり、消えていった。

鍵はチップを拾い上げるとガブモンに差し出した。

「はい、このチップでしょ」

「わあありがとう。そうだお礼と言っちゃなんだけどそのチップは君にあげるよ」

「ありがとう！」

「僕はいつもデジセントラルの武器屋にいるから。それじゃまた」  
そう言うとガブモンは帰っていった。

鍵もオブサーバーに戻った。

「ガブモンから話は聞いたよ。大変だったね」

「あ、いえ」

「ふむ・・では今回の件で君の力がわかった。よって君をブロンズ  
テイマーするよ」

「やったー！ありがとうございます！」

「うん、これからもがんばるんだよ。それとデジファームを1つ授  
けよう」

「ありがとうございます」

「自分のデジファームがどんなのか見に行くといいよ」

「わかりました。失礼します」

鍵はオブサーバーを抜け、デジファームへ向かった・・・

## はぐれデジモン『ブラックアゲモン』!?

データ森で無事ガブモンを発見し、クラブスエンジニアモンからプロンズテイマーの称号をもらった鍵は、自分のデジファームを見るため、もらったばかりのデジファームに行きデジファームの管理者(?)クルモンと話していた。

「・・・つまり、デジモンの『スキャンデータ』を実体化させたいのなら、ファーム内で『デジコンバート』すればいいでクル」

「なるほど・・・ところでクルモン、さつきクラブスエンジニアモンが言ってたんだけど、テイマーランクを上げるためにはどうすればいいの?」

「それはデジモンに話しかけてあげて、お願いがあるのならなるべく叶えてあげることですクル」

「ふーん、そうなんだ」

クルモンが何か言いたそうにしている。

「それでケン、お願いがあるでしゅが、『デジケーキ』というのが存在するらしいクル」

「わかった、取ってくればいいんだね」

「ありがとうでクル。デジケーキは『とつくんマウンテン』にあるらしいでしゅから気をつけてクル」

「じゃあ、行ってくるよ」

鍵はデジファームを出て、ワープパネルの前に立った。

「えーっととつくんマウンテンのアドレスはと・・・あ、あったあった。よし」

瞬間、鍵は山の中にいた。

「ここがとつくんマウンテンか」

鍵はデジケーキを探して歩き続けた。そして・・・

「あ、あった!デジケーキだ!」

鍵は前方に落ちているデジケーキを拾おうとした・・・しかし・・・

「おつと待ちたまえ、そのデジケーキは僕のものだ」

「えっ？ここに落ちてたけど？」

「とにかくそれは僕のものだ。さあこちらに渡してもらおう」

「いやだよ、これは僕が拾ったんだ。何故君に渡さなくちゃいけないんだ」

「フツ、仕方ない。いけつアトラーカプテリモン！」

「うう、仕方ない。ここは戦うしか」

「いけつ、サイバードラモン！」

突然見たこともないデジモンが現れ、アトラーカプテリモンを一瞬で倒してしまった。

「何ッ！？」

「いい加減苛めはやめたらどうだ、ケイン」

「くっ、覚えてろ」

ケインと呼ばれた男は去っていった。

「君大丈夫だったかい？」

「はい、ありがとうございます」

「じゃあぼくはこれで」

「あ、いない・・・まあいいや僕も戻ろう」

デジファーム・・・

「ただいま。はいクルモン」

「ありがとうでクル。こんな感じでデジモンとの中を深めていくのでクル」

「わかったよ。デジモンともっと仲良くなって強くしないとね」

「はあ？仲良くだあ？笑わせるね」

茂みから黒いアグモンが姿を現した。

「君は？アグモン？」

「俺か？俺はアグモンだが、はぐれデジモンの『ブラックアグモン』さ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5236i/>

---

デジモンストーリー

2010年10月11日22時43分発行